

座長抄録

プロソ'16 シンポジウム2 「オーバーデンチャーによる機能回復」

鱒見進一^a, 窪木拓男^b

Oral Rehabilitation utilizing Several Types of Overdentures

Shin-ichi Masumi, DDS, PhD^a and Takuo Kuboki, DDS, PhD^b

可撤性補綴装置と固定性補綴装置の良い部分をバランス良く合わせ持つオーバーデンチャーの歯科臨床における地位は揺るがない。超高齢社会を迎えた本邦においては、特に、よりよい機能性を持ちながら可撤性補綴装置であるが故の高い清掃性が注目され、最も重要な補綴オプションになったと言っても過言ではない。本シンポジウム2では、このオーバーデンチャーについて、その道のエキスパートの先生に御登壇いただき、他の治療オプションとの比較を含んだ診断とインフォームドコンセントから、各治療法の勘所まで余すところなく解説をいただくことにした。

維持・保持装置の違いから、オーバーデンチャーは、インプラントオーバーデンチャー、磁性アタッチメントを利用したオーバーデンチャー、テレスコープアタッチメントを利用したオーバーデンチャー、天然歯に各種根面板やアタッチメントを利用したオーバーデンチャーに分類される。まず、岡山大学の児玉直紀先生には、インプラントオーバーデンチャーが下顎全部床義歯治療の世界標準治療になりつつある現状を踏まえ、臨床研究データのメタ解析結果をベースに、本邦における現状とその展開について解説をいただいた。下顎総義歯の難症例では、犬歯部に2本埋植したインプラント体を連結したバーアタッチメント、もしくは、単独で使用するロケターアタッチメント、ボールアタッチメント、磁性アタッチメントを用いることで、口腔関連QOLが向上することから、欧米では標準治療になりつつあるという。一方、上顎の場合には2本では十分な力学的な安定が得られず、インプラント体の骨結合の喪失に繋がるリスク

が上昇することが示されているという。また、大阪大学の和田誠大先生には、近年進歩が著しいCAD/CAM技術を利用したインプラントオーバーデンチャーの設計、サージカルガイド、アタッチメントの作製にいたる最新のワークフローをご紹介いただいた。特に、ハレーションを起こしたCTデータと石膏模型の3Dスキャニングにより得られたデータの重ね合わせ（フュージョン）により、ハレーションのコントロールだけでなく、精度の高いガイドドサージェリーを行うことができる点をご説明いただいた。さらに、愛知学院大学の中村好徳先生からは、豊富な長期臨床例から導き出された磁性アタッチメントを利用したオーバーデンチャーの診断と設計、臨床の勘所についてご紹介いただいた。特に、コーヌステレスコープを応用した可撤性義歯において、維持コーヌスとして磁性アタッチメントを用いることにより、予後の安定が図られることが示された。最後に、京都でご開業の中居伸行先生からは、これらの各種オーバーデンチャーを取捨選択して臨床にどのように応用すべきか、確実な臨床手技を含めて、ご紹介をいただいた。特に、コピーデンチャーを利用したデンチャーゾーンを咬合器にトランスファーする方法や、インプラントのアタッチメントの確実な設計、施工方法など明日から役立つ臨床知識をいただくことができた。

これらの情報をまとめてお話しいただける機会は、日本補綴歯科学会においても少なく貴重であった。本機会が会員各位の明日からの臨床に大きく貢献し、国民に益することを心から期待したい。

^a九州歯科大学口腔機能学講座顎口腔欠損再構築学分野

^b岡山大学大学院医歯薬学総合研究科インプラント再生補綴学分野

^a Division of Occlusion & Maxillofacial Reconstruction, Department of Oral Function, School of Dentistry, Kyushu Dental University

^b Department of Oral Rehabilitation and Regenerative Medicine, Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences